

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	南西中国ミャオ族の服飾に関する文化人類学的研究：中国貴州省施洞鎮ダンプウの事例を中心に
Author(s)	肖, 凌翬
Citation	広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 総合科学研究, 3 : 107 - 109
Issue Date	2022-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053582
Right	掲載された論文, 研究ノート, 要旨などの著作権・著作権は広島大学大学院人間社会科学研究科に帰属する。©2022 Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University. All rights reserved.
Relation	



南西中国ミャオ族の服飾に関する文化人類学的研究 ——中国貴州省施洞鎮ダンプウの事例を中心に——

肖 凌翬

広島大学大学院総合科学研究科

A Cultural Anthropology Study of Costumes and Ornaments of Miao Focus on a case Study of Dampu from Shidong, Guizhou, China

XIAO LINGHUI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

論文の要旨

本論文は、南西中国ミャオ族の服飾に関する民族誌的研究である。中国南西地域に居住しているミャオ族は、長い移動の歴史によって複数のサブ・グループに分化し、数十種類の刺繍技法、特別な布製法などが知られ、その豊富さは中国南方少数民族の中でも有数である。中国の少数民族の装いに関する人類学的研究では、しばしば衣装に注目が集まり、その材質や文様の研究が行われてきた。少数民族独自の装飾品の研究も行われてきたが、衣装の研究とは別個に行われる傾向があった。本論文が対象とするミャオ族のサブ・グループの一つ、ダンプウの人々の装いについても、独特の衣装と夥しい数の銀装飾品を身に着けるダンプウの儀礼が、近年、多くの観光客や研究者の注目を集めている。彼らの衣装や装飾品などに関する多数の研究がなされてきたが、それらの研究は、衣装のみ、もしくは装飾品のみに注目することが一般的であった。本論文では、中国の少数民族の装い

の人類学的研究における、こうした民族衣装に傾斜した研究動向、および衣装と装飾品とが別個に考察されてきた研究動向とを踏まえ、人々が様々な場面において衣装と装飾品を選び、それらを組み合わせる実践を指す、「服飾実践」という概念を用い、衣装と装飾の両面から、人々の装いを記述分析することを試みる。

なお、筆者のフィールドワーク調査中、装いの情報のみについての記録分析では、ダンプウの人々が、いかなる歴史的、政治的背景の下で、服飾を選び、身に着けるのかを描きだすことができないことに気づいた。したがって、筆者は「服飾」の実態を考察するのみではなく、服飾を身につける人々を取り巻く、歴史的・経済的・政治的文脈も視野に入れて考察を行い、「服飾実践」の動態を把握することを試みる。

このような問題意識のもとで、本論文は5つの章で構成されている。

序論では、従来の装いの人類学的研究における衣装研究に傾斜した研究動向、および衣装と装飾

品が別個に考察されてきた研究動向を踏まえ、新たに服飾実践という概念を提起し、人々が衣装と装飾品を様々な場面でいかに選択し、組み合わせるかをトータルに捉えていく必要性を指摘した。本論文の研究対象である中国南西地域ミャオ族のサブ・グループ——ダンプウの人々の服飾の特徴を踏まえ、ダンプウの民族衣装と銀装飾を特に注目して考察していくことを述べた。

精巧な刺繍を施した伝統衣装を持つことで知られるミャオ族の服飾に関する先行研究の関わりでは、近年出版された2冊の民族誌の内容を詳細に検討することで、以下の3点を、本論文の記述考察の独自性として指摘した。第一に、従来の研究が注目してきた伝統衣装のみならず、銀装飾品にも注目し、両者を中心としながら洋服の着用にも注意を払い、ダンプウの人々の服飾実践をトータルに捉え、考察していくこと、第二に、従来の研究同様に、本論文においても女性の服飾実践が考察の中心となるものの、男性の服飾実践も含めて考察すること、また家庭を単位として服飾実践の考察を行うこと、第三に、ローカルな社会文化規範に加え、ダンプウの地における出稼ぎの拡大や観光化の進展、さらには研究者によるダンプウの人々の服飾実践の対象化といった、複数のより大きな構造的文脈を含む、いかなる構図のもとで人々の服飾実践が生成しているのかを考察すること、である。

第2章「フルドの概要と調査目的」では、調査地が所在する貴州省と台江県、および長期滞在調査を実施した施洞鎮の概況を紹介した。その後、ダンプウの主要祭日を聞き取りにより整理した。特にダンプウの人々が特に重視される祭り——姉妹祭、龍舟祭、龍舞花火祭について、伝統的な習俗について調査し、記録した内容を紹介した。

第3章「ミャオ族の服飾の過去と現在——ダンプウの生活から——」では、まず、ダンプウの歴史的立地性と服飾の関係について考察し、「清水江文書」などの資料を裏付けに、ダンプウが、清代において、木材交易などで経済的優位性を持っていたミャオ族のなかでも、とりわけ豊かなサ

ブ・グループであったこと、また、木材交易により清代の白銀が通貨として大量流入し、かつミャオ族は昔から通貨を溶かしてアクセサリーとして飾る習俗を持つため、ダンプウの華美な銀装飾は貨幣を原材料として発展したことを指摘した。次に、ダンプウの伝統衣装の現在について調査した結果を、ライフステージ別に、ダンプウの盛装と普段着の使い分けなどに着目して提示した。また、ダンプウの若者が、出稼ぎを経験し、またSNSから情報を得るなかで、いわゆるファストファッションの影響を受けていることにも言及した。そしてダンプウの銀装飾品の種類と用途を整理し、さらに、銀装飾の製作過程、人々の購入状況および商品化の現状について考察を行った。最後に、ダンプウの人々の服飾実践について、ダンプウの人々が、コミュニティ内の周りの目、すなわち「他人からのまなざし」を強く意識していることから、高額な銀装飾品を揃えねばならないという「純銀のジレンマ」に直面していること、また、かつては母娘関係のなかで、手作り刺繍と衣装製作が行われていたが、衣装の取引が市場化されていくなかで、伝統衣装をめぐる母娘関係は「衣装を手作りして、贈与する」という関係から、「手作り品と購入した衣装を組み合わせる」という関係に次第に変化を遂げたことを指摘した。

第4章「服飾品の商品化・観光開発・学術研究によるダンプウの服飾実践の変容」では、服飾品の商品化と、施洞鎮の知名度上昇による観光開発、さらに現地での学術研究の発展が、ダンプウの人々の生活や服飾実践にいかなる影響を及ぼしたのかについて考察した。

服飾品の販売現場と家庭内、服飾品の商品化・市場化の影響のなかで、刺繍パーツと銀装飾製品の価格が高騰し、ダンプウの人々は生計手段を変えることを含めて対応を迫られ、さらに服飾実践の注意深いコントロールが必要となってきたことを指摘した。さらに、出稼ぎ先で周縁化された生活を余儀なくされる経験を持つダンプウの人々が、故郷に戻り、観光客や研究者の「他人の

まなざし」に対して、ダンプウである誇りを外見的に示したいという願望を持つことが少なくないことを指摘した。これらの変容が服飾に及ぼす影響としては、①女性の評価は、かつては伝統衣装を製作する技術から女性の「賢さ」を評価するというものであったが、現代では女性は、家庭全体の経済力への貢献も含めてより多面的に評価されるようになったこと、②服飾がますます豪華化し、経済力によって服飾行動が分化していること、とまとめられた。

次に、施洞鎮の観光業の発展についてまとめ、考察した。当初は海外から注目されるだけであった「姉妹祭」などが、国家無形文化遺産登録されると、現地政府が本格的に観光開発を始めた。観光化の影響についての記述からは、地方政府主導で組織化され、盛大となった祭りが、「銀装飾」「刺繍」の形式化を促進してきたことがわかった。また、観光開発は地域に様々な問題を生じさせつつあるが、服飾のあり方にパフォーマンス化と呼べる変化をもたらした。しかしその裏面では、ダンプウ女性が、状況と周囲の人を慎重に見極めながら、伝統の服飾と他の衣装や装飾品を組み合わせた、ハイブリッドな服飾形式を創造することもあり、パフォーマンス化された服飾とハイブリッドな服飾とを場面によって使い分けていることがわかった。最後に、施洞鎮における学術の発展について、インタビューと参与観察から、貴州河湾苗学研究院が施洞鎮に学術的関心を持つ多数の学者・研究者を集めていること、学術的討論を行う場になり、ダンプウの人々に自分たちの固有の文化を継承する人々としての意識を彼らにもたらしことに今後貢献していく兆しがあることを指摘した。

終章である第5章「服飾に影響を与える諸セクターと服飾の行方」では、それまでの各章の論述内容をまとめた後、ダンプウの服飾に影響を与える諸アクターとの関係において、ダンプウの服飾実践が揺れ動く構図を明らかにし、そうした考察が持つ、今後の服飾研究への示唆として、以下の結論に至った。ダンプウの服飾実践が生成する

構図を踏まえるならば、単に調査地に向かい、服飾の現状やコミュニティ内部の関係について記録し、分析するだけでは、人々が、どのような力関係の影響の下で、どのようなジレンマや困難を抱え、「服」と「飾」を選択し、組み合わせているのかを、十分に考察することはできないことがわかる。服飾、刺繍などのデザインが持つ価値自体も、重層的文脈の中で、その都度、複雑に構成されていくわけなので、ある時点での物質文化の記録のみを重視する研究でない限り、こうした複数の文脈のもとでの服飾、ないしは服飾実践の動態を研究する必要がある。本論文では、観光化、服飾品の市場化、ダンプウの人々への学術的関心の増大、出稼ぎの拡大、そしてローカルな社会的文化的規範の5つの文脈から服飾実践のゆらぎを検討し、服飾実践が生成する構図を図で表現し、理解を深化させることを試みた。フィールドで見られた人々の喜び、苦しみ、躊躇い、困惑、悩み、そして工夫、創造が、いかなる構図のもとで生成しているのかを明らかにしようとする本論文の手法は、今後の現代中国における少数民族の服飾研究においても活かされうるものであると筆者は考えている。